

# 音楽随想

欧州の舞台から

～1～



若槻量子

ソプラノ歌手

私が初めて欧州の地を訪れたのは1992年、徳島中央

わかつぎ・りょうこ ソプラノ歌手。音楽博士。徳島市立高校から東京芸術大学音楽学部音楽科卒。同大学院博士課程修了。二期会公演「コン・ファン・トゥッテ」、新国立劇場「魔笛」などのオペラに出演したほか、欧州各地でコンサート多数。二期会会員。2004年からドイツ・シュツットガルト市在住。ヘレンベルク市立音楽院講師。

ロータリークラブの推薦でロタリー財団奨学生として、イタリヤ・ミラノ音楽院に留学した時だった。99年には文化庁派遣研修の留学生として再び渡欧し、ドイツで演奏活動をはじめた。その後パリトン歌手の夫との結婚を機に、本格的に演奏拠点欧州に移すこととなった。

## オペラ「かぐや姫」

私は2003年、東京での世界初演の際に「かぐや姫」を歌った縁から、今回も出演させていただいた。「かぐや姫」は、平井さんが、台本(歌もせりふも日本語)と作曲を手がけた渾身の秀作。筋書きは、かぐや姫が多くの求婚者を退けながら、最後は月に帰るというおなじみオペラ「かぐや姫」でかぐや姫を演じる若槻量子さん(最前列中央)、浴衣姿のチェコの合唱団の子どもたちが手にしているのは、かぐや姫にかける羽衣。指揮者の平井秀明さん(2009年4月、チェコ・プラハのスメタナホール(筆者提供))



# チェコ公演 日本語で

## 本物伝えてこそ国際交流

みもの。メロディーがとても自然で美しく、東京には「かぐや姫」だけを演奏する合唱団があるほど。当日は満席で、詰め掛けた1200人の観客を前に、全2幕をチェコ語の解説付きでハイライト公演した。

夫の吉原輝が姫に求婚する帝の役。竹取の翁のおじいさんは、チェコ人のO.K.シーシキさん。合唱は、東京から来たかぐや姫合唱団とプラハ合唱団。児童合唱はロールニチカ・プラハ児童合唱団で、浴衣姿が大変にかわいらしかった。

そしてチェコ人のソリストも合唱も、歌の部分はとてもきれいな日本語の発音で、出演者の私たち日本人も一様に驚くほどだった。

難しかったのは、やはりせりふ。彼らがせりふをしゃべると「燕の子安貝(つばくらめの子やすがい)」が「ツウバアクウラメノオウ、コオヤアスウガアイ……」みたいな発音になる。おじいさん役が一生懸命にしゃべるほど面白く、私も舞台上で笑いを噛み殺す始末だった。が、「ん

？ までよ」と考えた。といふことは、私がさもせられしくイタリヤ語やドイツ語でオペラに出ている時も、ネットは「本当の国際交流というものが、肌の感覚として実によく分かりました」と語っていた。翌日、劇場の前を通りかかった合唱団の方は、通行人は、外国人としてであって、せりふはおろか、歌でもどのくらいのものなのか、疑問もわく。

そして、おはあさん役の高島、大きな目というハッキリした顔立ちに、古典的な白髪のカツラのまあ、似合わなかったこと。しかも、175センチのおはあさん役にも、用意した着物は、そでが妙に短く、足と手が着物からヨキツと伸びている感じ。

ということは、今まで新国立劇場や東京の二期会で西洋風カツラをかぶり、スザンナだのデスピーナだのと呼ばれてその気になっていた私も、今回のおはあさん役のように、ドイツで買ったセーターの長いそでをまくりながら、ドイツのつかい固いキャバツでお好み焼きを焼いている。

そんなことを考えながら、今日も私はドイツのキッチンで、既に過ぎ去りつつあるのは、

ソプラノ歌手として欧州の舞台に立つて10年。近ごろますます「日本人として異文化のただ中にいる」と感じる。現地音楽事情について月一回、寄稿してもらおう。